

令和6年度 長野県図書館協会  
デジタル版 小中学校図書館部会だより 第168号

第74回長野県図書館大会（須高大会）を終えて

県図書館協会小中学校部会須高支部長  
須坂市立常盤中学校 宮入 勝彦

10月12日（土）、県内各地から700余名の方々にご参加いただき、第74回長野県図書館大会（須高大会）を開催することができました。都合により午前と午後とで別会場での開催となりましたが、当日は心地よい晴天に恵まれたおかげで、移動に際しての支障も少なく、全体を通して事故やトラブル等なく、無事に大会を終えることができましたことにほっとしております。

今大会を開催するにあたり、前年の松本大会終了後から、実行委員会及び市立須坂図書館事務局と相談を繰り返してきました。その中で第一に考えたことは、ここ数年、コロナ感染予防対策として実施されたオンラインを使用した形態ではなく、参加者参集型の大会に戻そうということでした。一堂に会することの大切さを考えたものの、果たしてどのくらいの方が参加してくれるのかという不安もありましたが、今回の状況が今後のあり方の検討材料になればという思いで、参集型の開催に踏み切りました。

午前中、墨坂中学校を会場にお借りして分科会を行いました。九つのテーマに分かれた分科会に、230名ほどの参加がありました。各分科会では、はじめに発表者の方々に日頃の取組について発表していただき、その後、グループに分かれて意見・情報交換を行いました。どの分科会においても、教員・学校図書館司書・公共図書館職員・読書ボランティア等、それぞれの立場の違いを超えて、活発に意見が交わされ、明るく、また熱く語り合う姿が見られました。

午後は、会場をメセナホールに移し、まずは実践事例発表を行いました。須坂市立東中学校の図書館司書の坪井先生からは、「ビブリオトーク」の活動を発表いただきました。生徒の読書意欲向上を目指して、ICT機器も取り入れた活動は、各校の今後の活動においても、たいへん参考となる発表でした。続いて、「市町村と県による協働電子図書館運営委員会」から「デジとしよ信州」の紹介がありました。キャッチフレーズにある「長野県民なら、だれでも・いつでも・どこからでも利用できる電子図書館」は、時代のニーズにマッチした新たな読書機会の提供につながるものだと思います。

実践発表に続いて、「ものがたりの魔法」というテーマで、角野栄子さんから基調講演をいただきました。メセナホール大ホールいっぱいの参加者を見て、「角野栄子さんをお招きすることができて本当によかった」と感慨深いものがありました。ご自身のブラジルでの生活体験や一冊一冊の絵本に込めた思いを、ユーモアを交えながらお話していただき、たっぷり「角野ワールド」に浸ることができ、満ち足りた気持ちにさせてもらい、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

大会テーマは「図書館という希望～今こそ『読書のよろこび』『図書館の存在意義』を語り合おう！～」でした。参加いただいた皆様にとって、読書の楽しみ・図書館のもつ可能性を改めて考える機会となったのであれば、うれしく思います。

最後に、大会の開催にご尽力・ご助言いただきました関係各位すべての皆様に感謝申し上げますとともに、来年度、北信越大会を開催する佐久支部にバトンを引き継ぎたいと思います。



## 第74回長野県図書館大会（須高大会）参加者の声

須坂市立旭ヶ丘小学校 山口 美直

須高大会は参集しての開催でした。5年ぶりの参集ということもあり、参加者の皆さんの熱量や息づかいを感じました。対面ならではのよさを味わえた大会でした。

午前は、9分科会の中から、希望の分科会に参加しての研修でした。私は第7分科会「視覚障害者サービスの実践から」に参加しました。二つの実践発表とグループ討議がありました。長野市立長野図書館の実践は、「すべての人に図書館サービスを」という理念の下、障害者手帳の有無を問わず、活字資料の利用が困難な方へ行うサービスの取組でした。施設環境を整えていること、協力する点訳者が20名、音訳者が25名いることに、参会者の方から感嘆の声がありました。公共図書館の努力と工夫があり、さらに協力者の連携により、質の高いサービスが実現することを学びました。「須坂あかりの会」の実践は、ボランティアで音訳してきた活動の取組でした。視覚障がいの方への音訳が中心の活動から、現在では高齢者の方へ対面で朗読を行うサロンの活動へと広がっているそうです。地域の新聞の音訳も行われており、そのまま読み上げるのではなく、季節のことは具体的にする等、わかりやすく聞き易い情報となるよう編集し、提供している事を知りました。今でこそインクルーシブが浸透し、共生社会の取組がなされていますが、「あかりの会」は40年前から活動している実績があります。これからの図書館運営や教育活動において、大変参考になる実践でした。

当日は天候に恵まれ、墨坂中学校からメセナホールまでの移動も、秋晴れの心地よい風を感じながら、須坂の町を散策する気分での移動することができました。

午後は、すぐに実践したくなったビブリオレビュー選手権の実践発表、使ってみたくなくなった電子図書館「デジとしょ信州」の発表がありました。基調講演は児童文学作家、角野栄子さんの講演でした。淡い黄緑色のお召し物で登場した角野さん。「赤いお洋服で登場されるかと思った」「今日はカラフルな魔女さんではないのね」会場内のささやき声と拍手で迎えられました。ひとたびお話しが始まると会場内は一瞬で静寂に包まれ暖かい空気が流れました。角野さんの魔法にかかった瞬間です。幼少期、お父様が語られた『桃太郎』のエピソード。「父は川から桃が流れていく様子を“どんぶらこっこすっこ”と言うんです。だから『桃太郎』は“どんぶらこっこすっこ”じゃなきゃダメなんです」と茶目っ気ある口調で紹介され、日本語の美しい響きについて、お話しなさいました。また、「過去をふり返るな」という方もいますが、私は思い出が力になって導いてくれる。これからの道筋になる」というお話しも心に響きました。講演終了後、もっと角野さんを感じたくて、物販コーナーにあった『おいしいふ〜せん』を購入しました。講演で話されたブラジル滞在の事や子ども時代の事等が角野さんの豊かなイメージと溢れるセンスで綴られているエッセイ集です。講演の余韻を十分に味わえる本でした。

10月13日に第74回長野県図書館大会が須坂市の墨坂中学校、須坂市文化会館メセナホールで行われました。「図書館という希望」今こそ「読書のよろこび」「図書館の存在意義」を語り合おう！を大会テーマに、9つの分科会、実践事例発表、角野栄子さんの基調講演をお聴きするという贅沢な一日を過ごさせていただきました。

分科会は第4分科会「ビブリオバトル～教育実践に学ぶ～」に参加しました。『ビブリオバトル』という言葉はよく耳にしていましたが、私自身は実際には経験したことがなかったので、授業の展開、児童の取り組みの様子などがわかりやすく紹介され、最初から最後まで興味が途切れませんでした。児童が本当にその本に惚れ込んで語る様子がとても印象的で、心がほっこりしました。参考になる資料が丁寧に紹介され、明日にでも挑戦してみたいと思いました。また、普段あまり関わりのない公共図書館の司書の方々と意見交流できたことも貴重な機会となりました。本と子どもたちをつなげてくれている図書館の役割は大きいと改めて感じました。午後の実践事例発表でも、中学校のビブリオトークの事例が紹介されました。中学生という多感な時期に大勢の人の前で発表するのは抵抗も大きいですが、ICTの効果的な活用によって主体的に取り組めることが分かりました。本を紹介するという目的意識をもって読み込むことで、その本の魅力を再発見してさらに好きになり、本と深くかかわる経験は、その後の生活をきっと豊かにしてくれると思います。かかわる大人が、工夫や目の前の児童生徒に寄り添った支援をすることで、生きた活動になっていくのだと感ずることができました。

基調講演は、2年間のブラジル留学で交流のあったルイジンニョ少年のお話が印象的に残りました。言葉もままならない中で留学し、ルイジンニョ少年が、身振り手振りでポルトガル語を教え、ブラジルの生活とつなげてくれたこと。そして、その思い出を文章にすることで書くことの楽しさに目覚めたこと。創作の原点となった出会い。そのルイジンニョ少年と、60年以上も経って再会を果たした場面に心打たれました。また、たくさん出版されている著書のお話も興味深かったです。私が子どもの頃にシリーズ第1作が出されたおばけのアッチシリーズの新刊本がこの日に発売されました。45年たった今も色あせることなく、楽しい気持ちで読むことができました。素敵な出会いと空想する心の豊かさに触れ、これからも角野さんの作品は多くの人を楽しませてくれるだろうと思いました。

この大会を通してたくさん刺激を受け、多くのことを学ばせていただきました。大会運営に関わられたすべての皆様に感謝申し上げます。

# 地区学校図書館教育研究会から

## 中信地区

10月28日 安曇野市立穂高南小学校 穂高東中学校  
「中信地区 図書館教育研究大会（安曇野支部）を終えて」  
安曇野支部代表 安曇野市立穂高北小学校 唐澤 信好

### 1 大会テーマ

「学びと心のより所となる学校図書館  
～学校内外の連携による読書・学習・情報センター機能の構築を目指して～」

### 2 公開授業・授業研究会

会場校	授業学級・授業者	教科・単元名	指導者
穂高南 小学校	4年3組 宮尾 菜々美 教諭	国語 「本のポップや帯を作ろう」	中信教育事務所 指導主事 小沢 正太郎 先生
穂高東 中学校	全校参加 生徒会担当・図書委員会	読書の集い 「東中×ミニ・ビブリオバトル」	中信教育事務所 主任指導主事 鷺澤 貴夫 先生

### 3 講演会（オンライン開催）

講師 宮澤 優子 先生（三重県伊勢市教育委員会 社会教育課勤務 長野県下條村出身）  
演題 「学びと心のより所となる学校図書館  
～学校内外の連携による読書・学習・情報センター機能の構築を目指して～」

4 参加人数 小学校20名 中学校23名  
オンライン講演会のみ参加4名 計47名

### 5 まとめ

#### 【穂高南小学校】

国語の単元名「本のポップを作ろう」では、自分の選んだ本の面白さを、ポップをつくって姉妹学級の2年生に伝える活動を行った。中央図書館の司書の方にポップの作り方（ポイント等）を聞いて、自分自身の言葉や相手に分かりやすい表現で工夫をしながら、ポップづくりを行っていた。司書の方のアドバイスをもとに、選んだ本の面白さをポップにどう表現すればいいかを、楽しみながら活動をしている姿が印象的だった。

#### 【穂高東中学校】

生徒会主催の「ミニビブリオバトル」を行った。全校生徒代表6名のバトルが、自分の気に入った本の魅力を自分の言葉で友だちに向かって発表をしていった。聞き手はバトルがなぜその本と出会ったのか、どこにその魅力を感じたのか等を、バトルに質問をし、それについて応えるディスカッションの時間が設けられていた。この活動を通して、本の魅力に触れ、作品の良さを自分の言葉で表現することの面白さや喜びを全校生徒全員が共感し合う素晴らしい機会となっていた。

#### 【講演会】

宮澤先生の講演では、上記の演題についてお話をいただいた。参加者からは、「GIGA スクール時代に即した学校図書館のあり方について、読書センター、学習センター、情報センターの3つの切り口から具体的にお話しいただき大変参考になりました。このような学びを私たち自身が続けて行かないと、これからの時代を生きる子ども達の資質・能力を育むことは決してできないし、学びの多様化に対応していくことはできないとまた強く感じました。」等の感想を多くの方からいただき、明日からの指針・活力になったようだった



## 令和6年度中信地区図書館教育研究会参加報告

豊科北小学校 竹内 千夏

穂高南小学校会場に参加し、4年生の国語「本のポップを作ろう」の授業を参観しました。読書や読み聞かせが大好きで、図書館に親しみを持っている4年生の子どもたち。本単元は、本を紹介したい相手を決め、その相手に向けて読んでほしい1冊をポップで紹介する活動です。本が好きな児童に、さらに幅広いジャンルの本を読むなど読書の幅を広げてほしい、そしてたくさんの好きな本と出会ってほしい、との願いから立ち上がったとのことでした。

この学習には、穂高南小の近くにある安曇野市中央図書館の司書の方の存在が大きく関わっています。これまでも何回も足を運んだことがある中央図書館の司書の方から、ポップのよさやポップ作りへの思いを聞き、「自分もやってみたい。」と、意欲が高まっていきます。当日の授業にも、ゲストティーチャーとして中央図書館の司書の方が参加し、本の題名やあらすじを書くだけでなく、キャッチコピーやセリフなどを使って、読んでほしい人に分かりやすく書くことが大切ということを児童に伝える場面がありました。児童は、相手に読みたいと思ってもらえるよう、それぞれ工夫しながらポップを作ろうとしていました。

授業研究会では、児童がのめりこんでポップ作りをする姿が話題となりました。導入時の確認は視覚支援等を用いてよりスリムに、必要に応じて友達と関わり合えるとよい、といった意見も出されました。

読書・図書館のプロである公共図書館の司書の方の存在により授業への期待度が増し、ポップ作りをしようとする児童にとって強い味方となったのではないかと思います。本物・プロと出会うよさを存分に感じる事ができたのではないかと思います。

講演会では、宮澤先生が「学びと心の拠り所となる学校図書館」と題して、未来を生きる子どもたちのための学校図書館のあり方と図書館活用について話されました。自校の図書館の機能向上に生かしたいと思いました。心に残る大会をありがとうございました。

安曇野市立豊科南中学校 太田 藍

安曇野市立穂高東中学校で、全校参加型の「ミニ・ビブリオバトル」を参観させていただきました。こちらの行事は生徒会主催で毎年行われており、生徒たちが楽しみにしている行事の1つになっているとのことでした。例年行われているからこそバトラーも質問者も良い意味で慣れがあり、積極的に参加・発言ができていたように感じます。

本を紹介するバトラーは希望者による立候補で決まっており、だからこそ自分が選んだ本をきちんと読み込み、生き生きと紹介する姿が見られました。紹介された6冊の本は小説に偏ることなく、経済や西洋史、絵本、総記などの分類が集まっていて、生徒たちは飽きることなく、どの本にも関心を寄せていました。

ディスカッションタイムでは、学年を問わず多くの生徒から質問がされており、本の内容や思い出を質問されることで、バトラーたちは3分の持ち時間（公式のビブリオバトルでは5分間）の中だと伝えきれなかった本の魅力をさらに語る事ができていました。

また、Chromebookを使うことで、その場で投票や集計ができていました。どの本がチャンプ本になったか結果がすぐにわかり、1時間の中で発表から表彰まで行っていました。

ライブ感を大事にしているビブリオバトルですが、その後の研究会では、本の情報を伝えるにあたってライブ感ばかりを重視をすると、正確性が欠けてしまう場合があることを心配する声がありました。一方で、生徒たちが「やらされる」のではなく、主体的に伸び伸びと取り組んでいるからこそ、和やかな雰囲気生まれていたという声もありました。

指導者の宮澤先生からは、ミニ・ビブリオバトルに発表したいと思わせる魅力があり、それが、全校生徒に対して語りかけるバトラーの姿や話し方につながっていること。生徒会として、ミニ・ビブリオバトルをやる事が目的ではなく、つきたい力のための手段になっていること。だからこそ、子どもたちによる評価、ふり返りの機会が欲しいこと。“もっと知りたい”“伝えたい”という、学びに向かう姿にもつながっていること。などのお話をいただき、読書活動と生徒会活動について考えさせられる時間となりました。

今回のためにご尽力いただいた穂高東中学校の先生方、本当にありがとうございました。

「南信地区学校図書館教育研究大会を終えて」

上伊那支部代表 伊那市立富県小学校 高橋 玲子

1 研究テーマ

学びを深め、知を活かす図書館教育のあり方  
～児童・生徒の豊かな育ちを支えるために～

2 公開授業・授業研究会

会場校	授業学級・授業者	教科・単元名	指導者
伊那東小学校	4年桃組 飯嶋 穂波	国語 「本の世界を広げよう」	木曾町図書館長 青木 裕美恵
東部中学校	2年4組 宮坂 貴之	国語 「平家物語・扇的」	南信教育事務所 指導主事 三石 啓介

3 講演

演題 「伝える・伝わる～心がけていること～」  
講師 平山 直子氏 (伊那ケーブルテレビ放送部長)

4 参加人数 118名

5 まとめ

【小学校】

研究テーマを「本に親しみ、主体的に調べ、学び合う児童の育成」とし、自分自身の図書館との関わりを考えながら、4年生の「本のポップや帯を作ろう」の学習を発展させ取り組んでいた。伝えたい人を具体的に想定(相手意識)し、どんなことを伝えたいか考えることで、自分ではなく伝えたい相手のことを中心に考えながら本の選定を行っていた。相手のことをじっくりと考えることで普段であれば選ばないような本の選定をし、そのおもしろさを伝えるためにじっくりと読み込むこともしていた。また、友だちとテーマ別のグループ毎に「作戦会議」(話し合い活動)を行うことで、選定した本のよさを深めることができていた。



【中学校】

教材である「平家物語」は国語の教科書に掲載されている古典作品の中でも異本の数が多く、作品によって多様な表現がなされていることを活かし、教科書を読み内容を理解することで終わりにするのではなく、それぞれに描かれている「与一」の人物像の違いに着目し、自分の「推し」を決めるといった授業を行った。

教材準備において、平家物語の諸本を集めることは大変であったが、本校の司書の先生に相談をして、伊那市の小中学校図書館、信州大学付属図書館から資料を取り寄せた。生徒は、諸本による与一の違いを分析し、まとめることができた。研究会では、図書館の役割として情報収集センターのみならず、授業づくりセンターの役割も果たしていることなどの意見が出された。



【講演会】

「報道」という現場から、言葉や文字で伝えることの大切さ、また平山氏が挑戦し続ける姿勢についてご講演をいただいた。

## 南信地区学校図書館教育研究会参加報告

伊那市立高遠小学校 小松 千保子

伊那東小学校4年桃組の『本の世界を広げよう「ももも！図書館をもり上げ隊！」』の授業を参観させていただきました。桃組の皆さんは、1学期に一人一人がお薦めする本のポップを作り図書館に掲示したことで、他の学年の児童や先生方と交流ができたそうです。本時は、2回目のポップ作りであり、さらに、前回と違って、自分たちがお薦めする本を読んでもらうための作戦会議の時間でした。相手意識を持ってポップを書くことをめあてに、同じテーマの本を選んだ児童たちがグループを作り、グループ内で話し合いながら表現や伝え方を考える時間となっていました。

オープンスペースの図書館は広々していて蔵書も多く、グループは各スペースに分かれ図書館全体を使って学習していました。前回作ったポップが掲示されており、キャッチコピーやイラストを使って、子どもたちが楽しんで書いたのだろうということが伝わってきました。本時では児童同士で「この本で、どこが印象に残ったの。」「ちょっと読んでみるね。」「これって、どうやって書いたらいいかな。」などの会話とともに、友だちが選んだ本を手取る様子が見られました。

友だちが選んだ本を読み合う姿は、広め合う読書の時間でした。ポップ作りは、用紙だけではなくタブレットも利用でき、枠があることで何を書けばいいかがわかりやすく、児童も書いたり消したり友だちと見せ合ったりしており、その活動の中で、新たな本との出会いや、友だちの視点に気付いた児童もいたと思います。本時以降に作成されるポップをぜひ見てみたいと思いました。

講演会は伊那ケーブルテレビの平山直子様を講師に迎え、言葉や文字で伝えることの大切さや平山様が挑戦し続ける姿勢についてご講演頂きました。報道という現場からのお言葉に、聴くこと、話すこと、人生での挑戦する姿勢が、子どもの頃からの積み重ねで培われるものであり、その教育の一端を図書館教育も担っているのだという思いを新たに感じています。開催にあたりご尽力いただいた先生方に感謝申し上げます。

箕輪町立箕輪東小学校 西村 敦子

伊那市立東部中学校2学年「いにしへの心を訪ねる 扇の的—『平家物語』から（光村図書 国語2）」を参観しました。授業の導入の場面で先生の音読を聞きながら、「今聞いているもの（「延慶本」と「今まで読んできたもの（教科書「語り本系（高野本）」）」との違いに気づき始めた時の教室内の小さなざわめきが印象的でした。「延慶本」との初めての出会いが、まず音読であったことは「本」がもつ大きな魅力だと思いました。図書館司書の先生との「連携」により、今ここに資料があり、生徒の驚きや学習が成り立っていることに、学校図書館や図書館司書の先生が授業を支えていることを改めて感じました。

活動内容や授業などに必要な資料や本のことなどを図書館司書の先生に相談すると、すぐに様々な「こと」や「もの」を準備してくださいます。しかし、それは、「連携」ではなく、図書館司書の先生がこちらのやりたいことができるように「協力」をしてくださっていたのでした。そうではなく、互いに目的が達成できる「連携」をしていかななくてはならないと思いました。そのためには、図書館司書の先生と担任などの間で双方の考えや願いなどを出し合ったりして学校図書館を活用することが、同時に、子ども達が様々な場面で学校図書館を活用できるようになることにもつながっていくのだと思います。

伊那ケーブルテレビジョン放送部長平山直子さんのご講演からは、仕事に対する強い意志とそれにかける使命感を感じました。平山直子さんの一言一言には力がありました。

「親しみやすく・誠実に・謙虚に」「Talk（話す事）・Tears・Time（時間をかけて）」「ふつうに・きちんと・きれいに」「思考過程の見える化」「話すよりも『書く』ことが大切」「伝え方が変われば、伝わり方も変わる」など、たくさんキーワードがありました。テレビやラジオということに限らず、今、生活している中にあるあらゆる「伝える」場面に大切なことだと思いました。発信側と受け取る側が別々ではなく、発信しながらも受け取り、受け取りながら発信しているのだ、と、気づかされました。授業でも日々の会話でも、もっと「ことば」を大切に使いこよう、伝えていこう、きいていこうと思います。

部会だよりは長野県図書館協会ホームページでもご覧いただけます。

長野県図書館協会 小中学校図書館部会だより 第168号  
発行日 令和6年12月20日  
発行者 長野市若里1-1-4 県立長野図書館内  
長野県図書館協会小中学校図書館部会（代表 林 明美）